～人と人の心をつなぐホールアース自然学校の災害救援活動～

震災発生から現在、そしてこれから…

ホールアース自然学校では震災発生後、福島県いわき市に入り、継続的に災害救援活動（＝以下活動）を行なってきました。過去、阪神に始まり、スマトラ沖、中越と、数度に亘り活動を行ってきました。しかし今回は過去のそれと全く異なる性質を持ったもので、スタッフ一人ひとりが現地で求められるものに耳を傾け、支援のあり方を考えながら、目の前の人に寄り添ってきました。ホールアース自然学校のこれまでの活動と今後の展望をレポートします。

物資が続々と集まる

今回、主な支援対象地として福島県いわき市を選びました。いわきには、関係の深い団体「NPO法人いわきの森に親しむ会(＝以下親しむ会)」があったことが、当地を支援先に選んだ最大の理由です。親しむ会とは、労働金庫連合会が支援する里山再生の取り組みである「ろうきん森の学校」プロジェクトを共に行っています。

いわき市は福島県の南部・茨城県との県境に位置し、北部のごく一部のみ原発30km圏にかかっています。原発は予断を許さない状況が続いていましたが、細心の注意を払いつつ現地入りすることを3月18日に決定、組織内に設置した「災害救援本部」を中心に物資とお金の支援を呼びかけました。すると、プログラム参加者や取引先、近所の人たちから多くの人から救援物資が続々と届きはじめました。連日連夜届く物資を、現地で使いやすいよう想像力を働かせながらスタッフ総出で仕分けをしました。物資は「何かしたい」という気持ちをもった人の「おもい」と同じです。2日間でトラック一杯の救援物資が集まり、多くの方のおもいを積み込み、3月23日、第一陣の4名が現地に出発しました。

その時、現地は…

現地入りしたメンバーは早速情報収集に入りました。福島は、地震、津波に加え、放射能と風評の〝四重苦〟が複合的に襲ってきていることが特徴で、注意深く観察することが大切であることを知りました。第一陣が入った当初、人口34万人のいわき市には約3800人が避難所に身を寄せていましたが、物資は行政と自衛隊の手によって基本的なものは避難所に届いていたものの、細かなニーズには応えきれていないようでした。そうした隙間を埋めるように現地のNPOや有志のグループがきめ細かな物資の配送などを行なっており、ホールアースの救援物資はそうした物資配送を行っていた「うつくしまNPOネットワーク」に託しました。

街を回ると地震で道路は波打ち、沿岸部は津波で壊滅的な打撃を受けていました。加えて、震災後暫く、原発の風評被害で人が入ってこなくなり、医療や福祉などの必要なサービスが不十分な状況が発生し、その後も続いていることもわかりました。そんな中、手探りで活動を開始しました。

実際避難所を回ってみると、配給物資だけだと栄養が偏り、2週間全く野菜も食べていないところもありました。そこで私たちは「元気炊き出し隊」と銘打ち、野菜たっぷりの豚汁や富士宮名物の富士宮やきそば、静岡茶を元気にふるまうことにしました。お茶は静岡県川根本町の茶業組合に、焼きそばは富士宮市のマルモ食品工業に支援頂きました。あたたかい食事を通じて現地の人の人柄の良さを感じると共に、厳しい避難所生活の中にも尊厳を失わない、人としての凛とした強さを感じました。

「おもい」はつながる

第一陣後も、5～7日間交替でスタッフが現地入りし、炊き出しや子どもプログラムなど、求められることを行うに従い、人のつながりが急速に広がってきました。数ある避難所の中でも極めて先進的な運営をしていた湯本二中の澤井校長（※「人」欄で紹介）との出会いからこの学校に深く関わることになりました。また、パルシステム静岡の紹介でパルシステム福島の安齋専務とつながり、全国から届いた野菜や生活用品を提供いただき、「元気炊き出し隊」として避難所や地域に届けました。

活動の中心地域であったいわき市常磐地区の温泉街では、老舗旅館・古滝屋の若旦那の里見さん、正木屋材木店の大平さん等30～40代の若手を中心にした活動が立ち上がっており、彼らの「地域を元気にする」活動をサポートしてきました。また風評被害で苦しむ現地の農家と首都圏の大企業の社員食堂をつなぐ農産物販売支援や、沿岸部の勿来（なこそ）地区、小名浜（おなはま）地区で相次いでボランティアセンター（＝以下VC）が立ち上がってからは、VCの方針に足並みを合わせ、首都圏からのボランティアツアー、自宅避難者のニーズ聞き取り調査なども行ってきました。この間、スタッフの古くからの友人である郡山の若きリーダー佐藤さんから依頼を受け、郡山の大規模施設に避難してきていた富岡町と川内町の子ども向けプログラムを出張実施もしました。親しむ会の方は、自らが被災しているにもかかわらず、ホールアースの活動を全面的にサポートいただき、彼らの拠点施設である湯ノ岳山荘を活動拠点として開放してもらいました。自らが被災者でありながら、地域のために活動する様々な人のおもいに触れ、支援する立場でありながら、逆に元気づけられることもしばしばでした。

現地に行かなくても できることがある

避難所での炊き出し

街頭募金活動

応援メッセージ

ボランティア！

川根本町からお茶を！

現地での活動が広がる一方、何かしたいというとおもいを抱えながら、様々な理由から現地にいけないスタッフもいました。そうしたスタッフの中から「自分達のできることをしよう！」という声が上がり、街頭募金をはじめました。やってみてわかったのは、自分達と同じおもいを抱える人が地元富士宮にもたくさんいたことです。中にはその場の所持金をすべて募金して下さった方もいました。

「募金」という行為を通じて、多くの方々から暖かい声を頂き、彼らの〝おもい〟を集める事ができました。

国際部門のスタッフは、世界中のWEにつながる人たちからのメッセージを、ソーシャルメディアを通じて集め、それを一枚の紙にして被災地に届けるという活動を展開しました。また別のスタッフは、親兄弟や知り合いに物資やボランティアの呼びかけを行いました。被災地から遠く離れた全国各地のホールアースの分校も、チャリティイベント等の独自の活動を展開しました。そしてこれらの活動を「災害救援事務局」のメンバーが有機的に繋げていきました。

ひとつひとつの行動は小さくても、集まれば大きくなり、被災地を支援する力になると個々のスタッフが実感しながら、活動は続いていきました。

国際部門のまりーが海外の声を集めていきました！

ボランティアを募りスタッフ３名と共に行ってきました！

自然学校としての「役割」と今後の活動の展望

湯の岳山荘にてスマイル☆キッズオンパク（石窯で焼き野菜作り）

震災後2ヶ月余りが経過し、いわき市では5月末時点で避難所の多くが閉鎖され、被災者は一時提供住宅・仮設住宅へ移りました。避難所が閉鎖され、人々が〝家〟に入ると、社会的な関心は急速に薄れていきます。しかし、被災者が「自らの足で立つ」ということがゴールだとすれば、本当に支援が必要なのはこれからであることは阪神の時の経験からも明らかです。被災者自身が普段の生活の中で地域内外問わず、人と人、人と自然とのつながりを実感できることこそ、それが自立の支えになると私たちは信じています。

今後もいわき市を中心に被災地での中長期的支援に関わっていきます。活動の柱として

①子ども交流
②復興ツーリズム
③エネルギーの地域循環

の3つを掲げました。

①は原発で室内での窮屈な生活を強いられているいわき市の子どもに、自然との接点、そして他の地域の子ども達との接点を提供するというもの。

②は、観光業に携わる方やボランティアセンターなどと連携しながら、他の地域の人との交流を軸に復興を後押して行くというもの。

③は、今回を機に、私たちの使うエネルギーをもう一度見直し、再生可能エネルギーの地域循環を福島から発信するというものです。

大きなテーマではありますが、いずれもホールアースの本業に近い活動です。中長期的支援はまずは現地の人のおもいがベースにあり、その上で、専門的な知識や技術を持った人材と財政基盤が必要です。そのためには本業に近い分野での活動が最も効果的だと考えています。

WE へ物資持ち込み第一号！！

一人暮らしの家へニーズ調査

ホールアースは「人・自然・地域が共生する暮らしの実現」をミッションに掲げています。今回の震災を機に社会で改めて問われていることは、奇しくもホールアースが過去社会に問い続けてきたことに共通する部分を多く感じます。大きな犠牲の先にあるものが社会の望ましい変化だとすれば、その主役は私たち一人ひとりです。被災地のみならず、日本に住む一人ひとりが自ら考え、できることを行動に移していくことがよりよい社会の実現の第一歩になるのではないでしょうか。

山川　勇一郎（ラガー）コーディネーター兼 大学院修士課程在籍

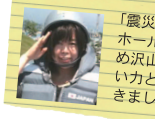
震災とその後の活動で実感したのは「人と人の絆」。仕事＆大学院＆親業の３足わらじ生活も７月で晴れて終了（大学院卒業予定）。今後はやりたいこと、やるべきことを実行するのみ！です。

福島からのメッセージ

池野上　幸弘（いわきの森に親しむ会）

「原発の爆発でいわき市から180kmの場所に避難した。避難先で幸せが日頃の生活の中に埋没しているに気が付いた。」

大平　祐子（正木屋材木店）



「震災に遭いましたが、ホールアースさんをはじめ沢山の方々の素晴らしい力と出会えることができました。ありがとう！」

木田　章一（いわき市四倉支所　経済土木課）

「いわき市は地震、津波、原発事故、風評被害の四重苦の中、早期復旧・復興に向け頑張っています。」

安齊　雄司（パルシステム福島）

「今の福島への一番の支援は！福島の産品を利用する一人ひとりの行動です。忘れないゾ福島という心を形に！」

里見　喜生（いわき市フラオンパク実行委員会）

「自分の子供に自信を持って地元のことを話せる大人を増やすこと。そのことによって、地域らしさが世代を超えて続いていき、力強い地域となっていく。大人が変われば子供が変わる。子供が変われば未来が変わる。今がチャンスだ！」

佐藤　徹哉（ビッグバレットふくしまキッズコーナー代表）

「元気な福島を取り戻すために頑張ります！」

福嶋　あずさ（いわき市議会議員）

「私達は未来を担う子供たちを守ることを第一に、いわき市を元気な町に戻すために前に進んでいますのでいわき市を、そしていわきの子供たちを応援して下さい。」

末永　さやか（小名浜ボランティアセンター）

「震災で多くのものを失ったけれど、1番大切な人々の絆がちゃんと残っていました。だから大丈夫！」

3.11から1年。未曾有の震災をふりかえり、今後の支援を考える

ホールアース自然学校では、元々つながりのある福島県いわき市を軸に、震災直後から2ヶ月は現地に駐在し、その後も断続的に支援活動を行っています。私は支援活動を通じて、前例や答えのない状況下で、「想い」を「行動」に移している多くの人と出会いました。そして、そうした人達の強さや優しさに触れ、「自分も関わり続ける」と決意しました。

震災後、「絆」という言葉が、悲劇の中の一縷の希望のように世の中に溢れかえっています。ただ、この「絆」という言葉について最近非常に大きなショックを受けました。2011年を象徴するこの言葉は、実は福島の人にとっては嫌な言葉だと最近の訪問で耳にしたのです。

現地の方曰く、原発による避難で家族はバラバラになり、深刻なケースも出てきているそうです。いわき市は原発の影響を比較的受けにくい立地条件から、原発至近の市町村から約2万人が避難してきており、いわき市からは約1万人が市外に避難しています。現地の方によると、放射線に関する考え方は、市内においても100人いれば100通りの考えがあるとのこと。見えない放射線によって、家族や地域の絆はズタズタに傷つけられていました。

市街地は賑やかに人が行き交い、一見普通の生活を取り戻しているように見えます。支援活動で出会った人を訪問しても、表面上は震災前の生活と変わらないように見えます。しかし、よくよく話をしてみると、そこには見えない放射能への複雑な思いがありました。彼ら曰く、福島に住む人達は"貝"になっている―つまり、「心の殻を閉じている」状態だそうです。

放射能に対してそれぞれが異なる考えを持つ中で、ぶつかり合うことを嫌う福島の人達は、自分の考えを極力主張しないようにしているとのことでした。自分の思いを口にできない暮らしとは、どのようなものなのでしょうか。

平穏な生活を続けている私達にとっては到底想像が及ばない部分ではありますが、自分の暮らしについて改めて考えさせられた出来事でした。

では、そのような環境で育つ子ども達はどうなっているのでしょうか。子どもは地域の大人を見て育ちます。場所によっては外遊びが制限され、自由が奪われる中で、「外で遊ぶと病気になる」と言う園児もいるそうです。また、神経をすり減らした親を少しでも楽にさせてあげようと「自分が元気を出さないと！」と頑張りすぎている子もいるそうです。

皆さんが同じ立場だったらどんな生活を選択するでしょうか。もしかして、放射線の心配のない遠くに避難することを選択する人も少なくないのではないでしょうか。

しかし、私がいわき市で出会い、つながった人たちは、そんな状況でも前向きに生きています。自分たちで変えようとしています。自分の子どもや孫の世代もずっと彼の地に住めるよう、声をあげNPOを設立し、様々な形で想いを行動に移しています。

今後の支援活動

ホールアース自然学校は、今後もそうした現地で前向きに生きる方たちと行動を共にしていきます。震災からの復興は、特に福島では「これだ」という道は未だ見えません。ただ、原発や放射線の影響を解決するには長い年月を要するのは間違いありません。

私たちは現地のNPO等と連携しつつ、短期・中期・長期の目標を共有し、現地での活動を続けていきます。

2011支援金活用報告

【収入】	
募金箱	¥ 229,405
募金	¥2,021,487
計	¥2,250,892
【支出】	
救援物資購入	¥ 141,719
子どもキャンプ	¥ 394,034
炊き出し	¥ 108,060
計	¥ 643,813

活動の一つの柱は私達が30年来関わり続けている「子ども」に対する支援です。具体的には、いわき市内に子どもが自由に外遊びをできる森を作りたいと思っています。福島では街中より森林が比較的線量が高いと言われます。そのため、森の中での自然体験は多くの人の理解は得づらい環境にあります。そこで、地元のNPO「子どもフォレストクラブ」と連携して、線量の低い街中に新しい遊び場を作り、長期的にはそこに新たな森を作る。子どもは子どもらしく、自由に木や土、落ち葉の上で遊び、それを見守る大人たちがいる。そんな場所を街中に作っていきたいと思っています。

ホールアース自然学校は「社会運動体」です。スタッフ一人ひとりが今一度しっかり足元を見て、自分の暮らしに対する考えを持ち、未来についての自分の思いを言葉にする。そして、自らが実践することを通じて社会を変えていくことが使命です。そのために、これからもできることを行動に移していきたいと思います。

2011年9月
栃木にある星ふる学校「くまの木」の協力で実施した、
福島を元気にする子どもキャンプ in 栃木
(右写真)栃木の里山にある廃校となった小学校にて、川遊びや虫探しで思い切り遊んだキャンプの様子です。

2012年3月30～4月2日
福島を元気にする子どもキャンプ in 富士山
富士山ならではの洞窟を探険!地元のお祭りに参加★

福島を元気にする子どもキャンプ in 栃木

夫津木　学ふつき　まなぶ(ガッツ)

富士登山やアラフジなど、山のプログラムを担当。元消防職員としての安心感と底なしの体力がセールスポイント。